

近畿における遠賀川系甕の成立過程

— 摂津・河内・大和の弥生甕 —

The Formation Process of Onga River-type Jars in Kinki
— Yayoi jars from Settsu, Kawachi and Yamato —

藤尾慎一郎

はじめに

① 研究史—問題の所在—

② 遺跡ごとの弥生甕の成立過程

③ 近畿中心部における遠賀川系甕の成立過程

おわりに

[論文要旨]

本稿は摂津・河内・大和など近畿中央部において弥生甕が成立する過程を明らかにしたものである。弥生甕とは弥生Ⅰ期の西日本各地に新たに出現する甕を指し、これまで主に板付式、遠賀川式、遠賀川系の甕とよばれてきたものである。私は先に、九州北部から中部瀬戸内にかけての弥生甕を検討して、弥生甕には系統を異にする三つの流れがあることを明らかにした。一つは早期の突帯文甕を母胎とする突帯文系甕が弥生甕となるもので、筑後の亀ノ甲タイプや豊後の下城式などが該当する。二つ目は、一つ目と突帯文甕を母胎とする点は同じだが、突帯文系ではなく外反口縁甕を目指す動きである。西部瀬戸内の口縁下端凸状甕が典型的な例である。三つ目は中期無文土器の系譜を引く板付祖型甕を母胎に、板付Ⅰ式甕、遠賀川式甕へと向かう流れである。1980年代の半ばまで弥生Ⅰ期の甕といえば、三つ目の甕を意味していた。はじめの二つは分布域が狭く、地域ごとに特徴的なあり方を示すことから「地域甕」、三つ目は広範囲に分布し、地域差も少ないことから「標準甕」と命名した。この視点にたって近畿中心部の弥生甕について検証したのが本稿である。分析の結果、次のことがわかった。

一つは遺跡ごとに成立する弥生甕の種類は異なること。二つ目はこれらの遺跡では、まず突帯文系と外反口縁甕をもつ地域甕が成立した後、限られた遺跡のなかで標準甕が成立するために、標準甕は時期的にも地域的にも分布が限られることを確認したことである。

以上のことから、近畿の遠賀川系甕はまず屈曲型一条甕が外反口縁甕へと変容したあと、中段階になって遠賀川系甕として定型化すると理解した。地域甕から標準甕が出てくるのである。当初から標準甕が成立し、その影響で外反口縁甕が成立する中部瀬戸内以西の地域との大きな違いである。

はじめに

本稿は、大阪湾沿岸を中心とする地域における弥生甕の成立過程を検証したものである。弥生甕とは弥生時代Ⅰ期になって新たに成立する甕のことで、これまで主に板付甕、遠賀川式甕、遠賀川系甕とよばれてきたものをさす。私は弥生甕の中に外反口縁をもつ標準甕（板付系甕や遠賀川系甕の主体を含み、広範囲に分布）と、長原式や口縁下端凸状甕のような突帯文土器に系譜をもち、分布が限定される地域甕を設定した〔藤尾2002〕⁽¹⁾。この説を踏まえて同じ視点から摂津・河内・大和において弥生甕がどのようにして生まれてくるのか、その過程を検証し、あわせてその意味するものを考察した。

戦前に大阪府高槻市安満にあった京都帝国大学摂津農場から出土した有紋の甕である安満B類土器を、小林行雄が、中山平次郎のいう第二系土器との関連から注目し、福岡県遠賀川の河床にある立屋敷遺跡出土土器との共通性をふまえて、遠賀川系土器と命名したのが、近畿における弥生Ⅰ期土器研究の出発点であった。

以来、この甕の出現過程は、九州北部からの直接伝播説をへて、現在では灘単位に一つずつ伝わってきたとする、下條信行のリレー式伝播説〔下條1995〕⁽²⁾が有力になっている。

しかし私は、中部瀬戸内までのリレー式の直接伝播説、それ以東へは情報を主体とした間接伝播説を提起し、西日本弥生Ⅰ期文化二段階伝播説を発表した。その根拠を九州北部から中部瀬戸内にかけて分布する標準甕と地域甕が織りなす、地域ごとの特色に求めたが、近畿における弥生甕の成立過程については、本稿での立論を予告しておいた。

本稿の構成は次のとおりである。第1に、弥生文化が近畿へといたる拡散形態が、九州北部からの直接伝播説から、灘単位の間接拡散説へと移っていった研究史と、近畿中心部における長原式を代表とするⅠ期突帯文土器の存在が、この地域における初期農耕集落の成立過程研究に与えた影響について述べる。

第2に大阪湾沿岸の諸遺跡における遠賀川系甕の成立過程をトレースする。

第3に大阪湾沿岸における遠賀川系甕成立過程の特色を述べる。

①……………研究史—問題の所在—

一 直接伝播説から間接拡散説へ

九州北部で始まった本格的な水田稲作が、どのような過程を経て近畿に伝わったのか、という弥生稲作の拡散問題は、遠賀川式土器や高身長の人骨が西日本の広い範囲に短期間で拡がる事実を根拠とする直接伝播説の段階から、大陸系の磨製石器や木製農具を対象にした詳細な地域色研究の結果、中部瀬戸内を媒介とする間接拡散説へと大きく替わってきた。紙数の関係からそれぞれの説を細かく紹介できないため、概要のみ提示する。

1 直接伝播説の根拠

1931年、福岡県北東部を南北に流れる遠賀川の河床から見つかった土器と、大阪府高槻市で見つ

かっていた安満B類土器との類似性に注目した小林行雄によって、1932年に設定されたのが遠賀川式土器である〔小林1932〕⁽³⁾。このうち甕は、如意状口縁、頸部への横位ヘラ描き沈線、口唇部直接刻目という特徴もつ。小林はこの土器をもとに、近畿の弥生文化成立に関わる重要な指摘をおこなっている。「遠賀川式土器と安満B類土器は、一つの文化系列にはいるにもかかわらず、二つの文化期が認められる」という指摘は、両者の間に文化伝播が存在したことを認めたものである。これは九州北部と近畿の遠賀川式土器との間に、ある一定の時間差が存在することを意味する。ここに両者の時間的關係がまずおさえられたことになる。

1934年には名古屋市西志賀貝塚でもこの種の土器の存在が明らかになったのをうけて、遠賀川式土器が西日本弥生前期土器の総称となるとともに、齊一的な土器が広範囲にわたって分布することも認識されたのである。時間差はあるが齊一的な姿をみせる点はきわめて短期間に伝わったことを推定させるに十分な考古学的証拠であった。

小林が指摘した九州北部と近畿との間の時間差が実際にどれくらいと考えられていたのかは、佐原真の数十年という言い回しからもわかるように、きわめて短くみられていることがわかる〔佐原1975〕⁽⁴⁾。また伝播形態に関しては、九州北部に渡来した渡来人の二世・三世たちが一気に西日本の各地に入植したという図式で捉えられている。これは韓半島から高身長の人びとが渡来し拡散したという金関丈夫の指摘〔金関1955〕⁽⁵⁾と無関係ではないと考えられる。

近畿への直接伝播説は、渡来人の子孫たちによる短期間の入植説によって支えられており、これこそ弥生文化成立に関する渡来人主体者説の根拠とされたのである。

2 間接拡散説

1978年の福岡市板付縄文水田の発見以降、西日本各地で遠賀川系土器出現前後のコメや稲作関連遺跡があいついで見つかったことによって、土器、大陸系磨製石器、木製農具のあり方が明らかになったが、その内容は九州北部から近畿へと一気に直接伝播したとはいえない内容だったのである。たとえば突帯文土器と遠賀川式土器の型式圏の地域的枠組みは基本的に変わっておらず、在地の土器を基盤にI期土器が成立したことを指摘した拙稿〔藤尾1991〕⁽⁶⁾や、大陸系磨製石器や木製農具の検討から、リレー式伝播を提唱した下條信行〔下條1995〕の研究はそのことを指摘した好例である。さらに間接拡散説の背景には、在来の人びとが新しい文化を選択的に受容して弥生文化を作ったという縄文主体論があることも忘れてはならない。

3 まとめ

以上のように現在は、玄界灘沿岸地域→西部瀬戸内・中部瀬戸内→近畿という二段階の間接拡散説が中心となっている。近畿の遠賀川系土器についても、胎土や文様を中心に、中部瀬戸内の遠賀川系土器の強い影響下にあることが明らかにされている状況である。筆者は九州から中部瀬戸内へと至るリレー式伝播説には賛同するが、それ以东へ至る拡散過程については、単なる延長線上にはなかったという見通しを前稿〔藤尾2002〕において指摘している。

そこで本稿では地域色を強く反映する甕を取り上げ、大阪湾沿岸を中心とした四つの遺跡において、遠賀川系甕がどのように成立したのかを検討し、中部瀬戸内の直接の影響下に成立したという説の検証をおこない、東方拡散の実態について考える。

二 近畿のⅠ期突帯文土器

近畿に遠賀川系土器が出現する直前に使われていたのが突帯文土器、そしてその系統をひく弥生Ⅰ期の甕が突帯文系甕である。近畿の突帯文系甕といえば、和歌山県紀ノ川流域の太田・黒田型甕が有名である。中段階の遠賀川系土器に伴うこの甕は、当時もっとも新しい近畿の突帯文土器と考えられていた船橋式の後続形式として理解されていたが、河内や大和などの近畿中心部には存在しなかったため、Ⅰ期の突帯文系甕は近畿の周縁部にのみ残存し、中心部の第Ⅰ様式の甕組成は遠賀川系甕単純を示すという考え方が1970年代までの常識だったのである。

そのような状況の中、新たに発見されたのが大阪市内の長原式土器である。船橋式に後続する突帯文土器として位置づけられたものの、遠賀川系土器との時期的な関係は混乱した。古い型式が残存しやすい浅鉢を基準に西日本晩期土器編年の中でこの甕の併行関係が考えられたからである。第Ⅰ様式古段階や中段階の遠賀川系土器と共存することが確認されていたのも関わらず、縄文晩期最終末に比定されてしまった。

このような回り道はあったものの、弥生時代の研究者たちによって、長原式が第Ⅰ様式に併行する突帯文系土器であることが確定すると、この土器を作った人びとはどういう人びとだったのかという問題を中心に、近畿第Ⅰ様式の集団関係論が活発化した。すなわち、遠賀川系甕だけを使用する集団（山賀）と、突帯文系甕だけを使用する集団（長原）、そして両者を少しずつもつ集団（水走）が大阪平野で共存したことの意味をめぐって、多くの説が公表された。

それは多くの場合、生業を異にする集団差に反映している点では共通していたが、遠賀川系甕を使う集団の出自をめぐっては、近畿外からの移住者集団と考える説と、在来人が新たな文化を受け入れて狩猟採集民から農耕民に転換したと考える説に大きく分かれている。また移住者集団とは渡来人ではなく、中部瀬戸内からの移住者とする考えと、河内渦周辺部以外の地域から河内渦周辺部に移住した在来の集団とする考えの二つがある。

大変興味深い問題ではあるが、紙数の関係ですべてを取り上げられないため、本稿では遠賀川系甕が出現する過程を検証するなかで、在来人が果たした役割を通じてのみ触れるにとどめたい。

②……………遺跡ごとの弥生甕の成立過程

検討したのは神戸市大開遺跡、大阪市長原遺跡、東大阪市水走（みずはい）遺跡、同若江北遺跡、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡である（図1）。

1 神戸市大開遺跡〔前田佳久編1993〕⁽⁷⁾

遺構は、弥生早期とⅠ期の二時期がある。環壕と考えられている溝状遺構はⅠ期に属し、拡張前と拡張後の二時期に細別される。環壕が出現する前の住居跡は未確認だが、突帯文土器単純段階の土器を出土する廃棄土坑などが見つまっているため、調査者は地形からみて調査地点の北西方向に住居域が存在していたと予測している。したがって早期からⅠ期新段階まで地点を変えて集団が存在していたと考えてよいだろう。

環壕が掘削された時期は長原式の段階と考えられており、その後、拡張される。当初の環壕内の面積は1200㎡であったのに対し、拡張後は2000㎡と約倍増している。壕の断面は、ゆるいV字形を

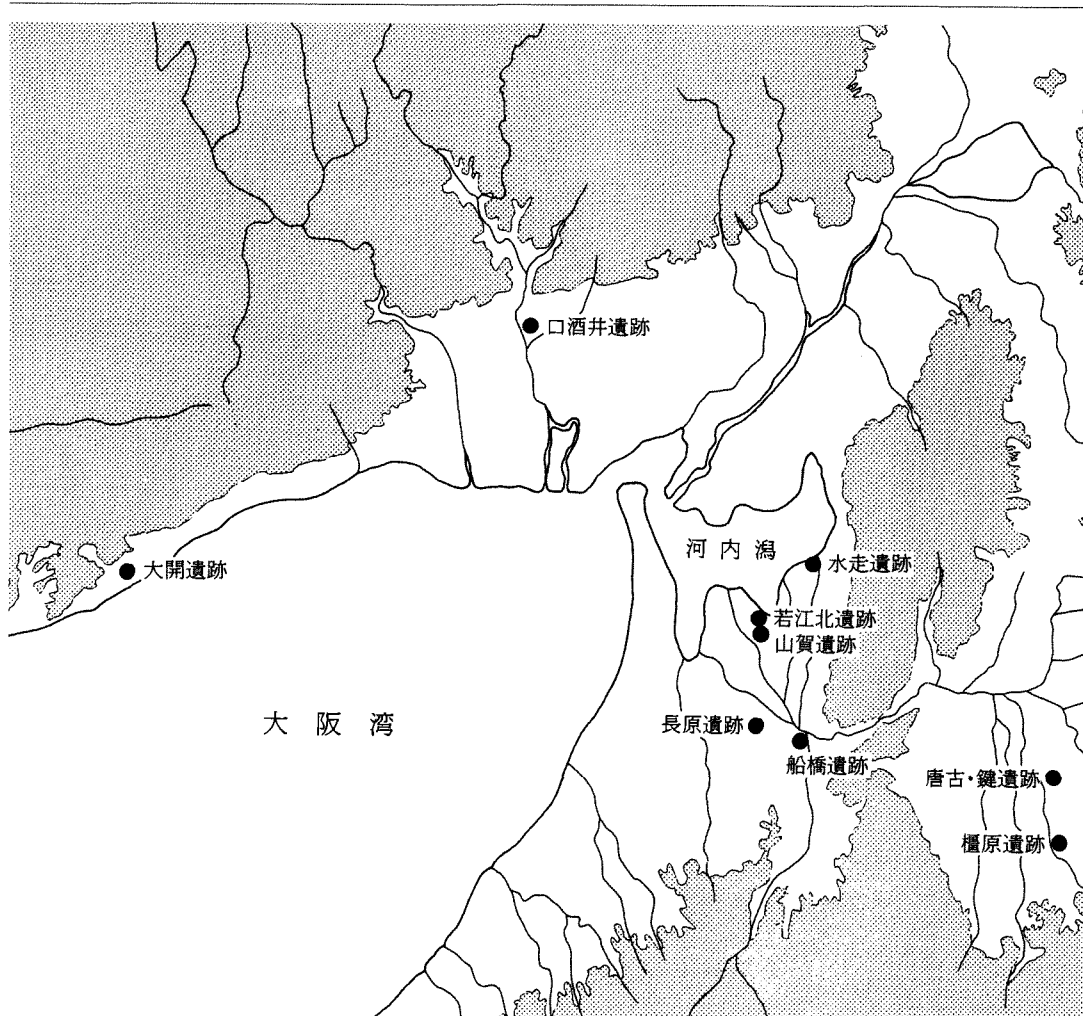


図1 弥生早～I期の代表的な遺跡

なす。3～4軒の住居を一単位とする20人前後の集団によってムラが営まれていたと考えられている。なお拡張される時期は少量の削りだし突帯が伴う時期という。

出土した遠賀川系土器は、摂津地域最古に比定されている吉田遺跡と同じタイプに属し、第I様式古～中段階の古いところに併行するとされ、これに少量の突帯文系甕が伴う。しかし甕組成に占める突帯文系甕の割合は約10%なので、いわゆる共伴といえる状況にはない。

石器は大陸系磨製石器をもたず、逆に縄文系の石棒を12本ももつなど、祭祀面に縄文的様相を強く残している。

図2-1は、第4遺構面で検出された弥生早期（報告書では縄文晩期）の土器溜まりSX602から出土した突帯文土器である。縄文時代の河道が機能を停止して、湿地状になったところに投棄されたと考えられている。図示してはいるが、突帯文土器以前に位置づけられる口唇部直接刻目土器や、胴部下半に組織痕文をもつ碗とともに出土していることから、突帯文土器の中でも最古式に位置づけられる、屈曲型一条甕である。なお伊丹市口酒井遺跡に特徴的な屈曲型二条甕はほとんど

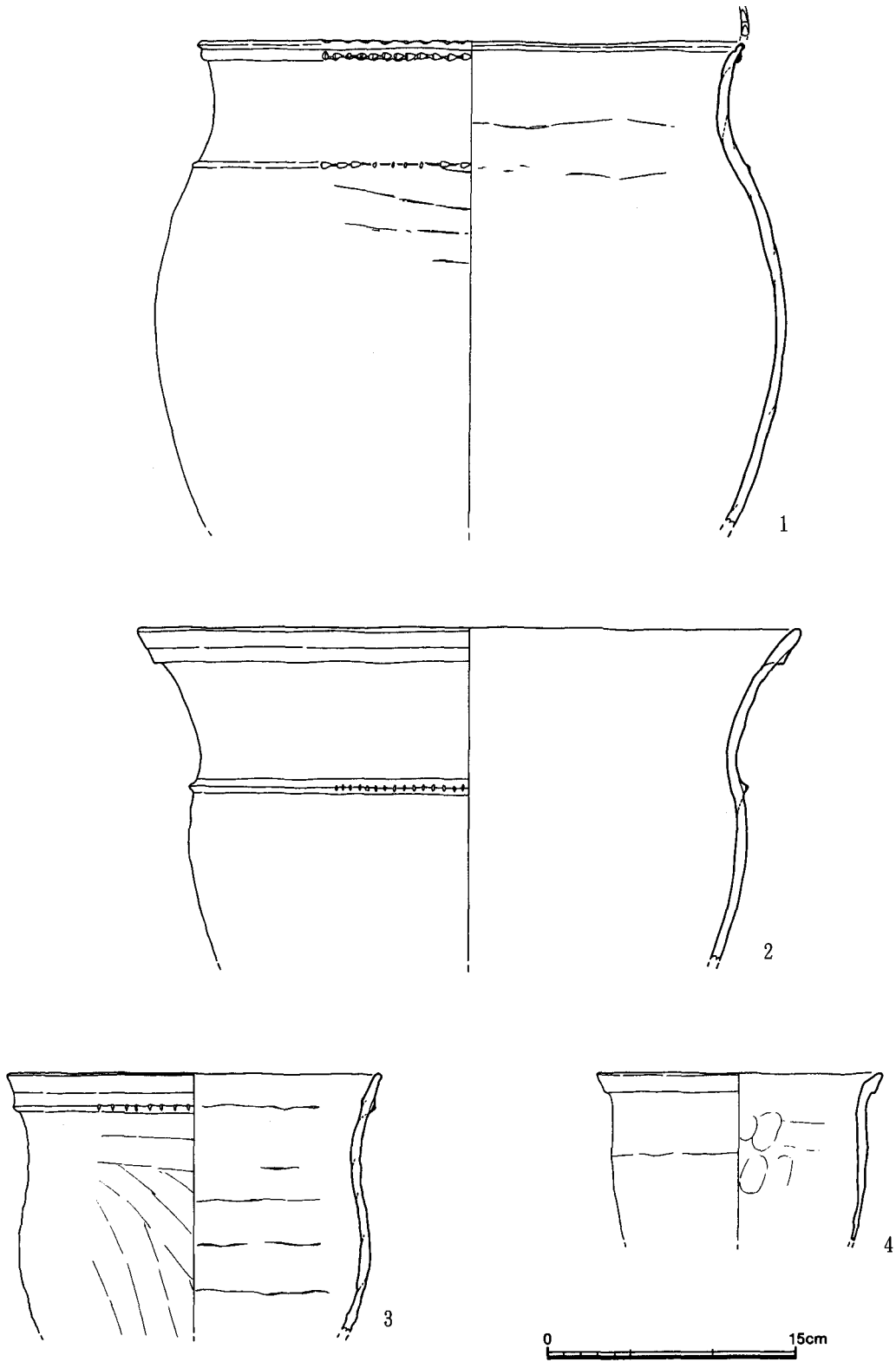


図2 神戸市大開遺跡出土土器実測図1 (縮尺1:4)

みられないため、調査をおこなった前田佳久はこの遺構の時期を屈曲型一条甕単純段階に比定している。突帯文系甕が現れるのは弥生Ⅰ期になってからである。図2の2～4を突帯文系の甕とみることに異論をもつ研究者はいないであろう。図3にはいわゆる遠賀川系の甕の特徴である外反口縁をもつ甕を図示した。

図2-2・3は、いわゆる播磨系突帯文深鉢とよばれている土器で、口縁端部から突帯幅一つ分以上、下がったところに突帯を貼り付ける。突帯は下方向に垂れ下がり、口縁部の内面には強いヨコナデによる凹部ができる。胎土や発色は弥生的な特徴をもつが、製作技法には弥生的な特徴はみられず、ケズリや擦過痕調整を施し、最終調整としている。同4は、島根県松江市タテチヨウ遺跡によくみられるタテチヨウ型のⅠ期突帯文系甕である〔藤尾2000〕⁽⁹⁾。

3点とも図2-1の屈曲型一条甕の器形を引き継いでいて、製作技法とあわせてⅠ期突帯文系甕であることは確実である。その意味で筆者のいう、突帯文土器としての弥生化〔藤尾2002〕が、ここ神戸地域でもおこなわれたことがわかる。筑後の亀ノ甲タイプ、豊後の下城式、出雲の蔵小路西遺跡や北講武氏元遺跡と同様、播磨系突帯文深鉢を弥生Ⅰ期の地域甕として位置づけることにする。

ただし神戸地域の甕組成に占めるⅠ期突帯文系甕の割合は、1割以下ときわめて低いことから、弥生化の主体はあくまでも図3に示した外反口縁甕にあることはいうまでもない。しかしここで注目したいのは、外反口縁甕にも屈曲型一条甕を母胎とした弥生化の流れのなかで捉えられる可能性のある甕があることである。

図3-2は、その典型例と考えられる資料である。張った胴部、外傾接合による粘土帯積み上げによって造り出された口縁下の段は、遠賀川系甕と突帯文系甕、双方の特徴をあわせもつといえよう。3・4・5も口縁部から胴部最大径にかけての形に、この雰囲気を残す点を重視して、屈曲型一条甕を基盤に遠賀川系甕を目指したものと考えられないであろうか。突帯文土器との共通性をもつ土器はこれだけではない。7は胴部から口縁部にかけて明瞭に外反するために明瞭な稜を口縁部内面にもっている点、口唇部下端に凸状甕風の出っ張りをもつ点が、2～5より新しい特徴をもちながらも、突帯文土器の技術系譜を引くものと考えられるのである。

このような在地の突帯文土器を母胎とした弥生甕創造の動きは、播磨型、外反口縁甕を問わず、ほぼ同時期に起こったことが、出土した遺構の時期から推測できる。1と2は環壕SD02下層出土、3・7・8はSB404住居拡張前の出土なので、環壕集落が作られた当初から、弥生甕創出の動きが始まったことを示している。したがって突帯文土器の特徴を強く残す2と、遠賀川系甕としてかなり定型化した1・7・8との間に時間差をあまり認めることはできない。

西からの新しい文化の波を受けて、突帯文系甕として弥生化する播磨系深鉢という地域甕の動きと、突帯文土器の作り手たちによって、突帯文土器を基盤に外反口縁甕を創出しようという二つの動きが、ほぼ同時に起こったと考えられる。もちろん中心となった動きが、外反口縁甕であったことはいうまでもない。

2 長原遺跡〔長原遺跡調査会編1978〕・〔田中清美・家根祥多編1982〕⁽¹⁰⁾

長原Ⅲ、9層と7A層の土器の一部を図4に示した。1・2は砲弾型一条甕、4・5は屈曲型二条甕である。すべてⅠ期の突帯文系甕だが、大開遺跡の主流である屈曲型一条甕は基本的にみられない。もともと瀬戸内や近畿の突帯文土器は、屈曲型一条甕単純段階から、砲弾型一条甕と屈曲型二条甕

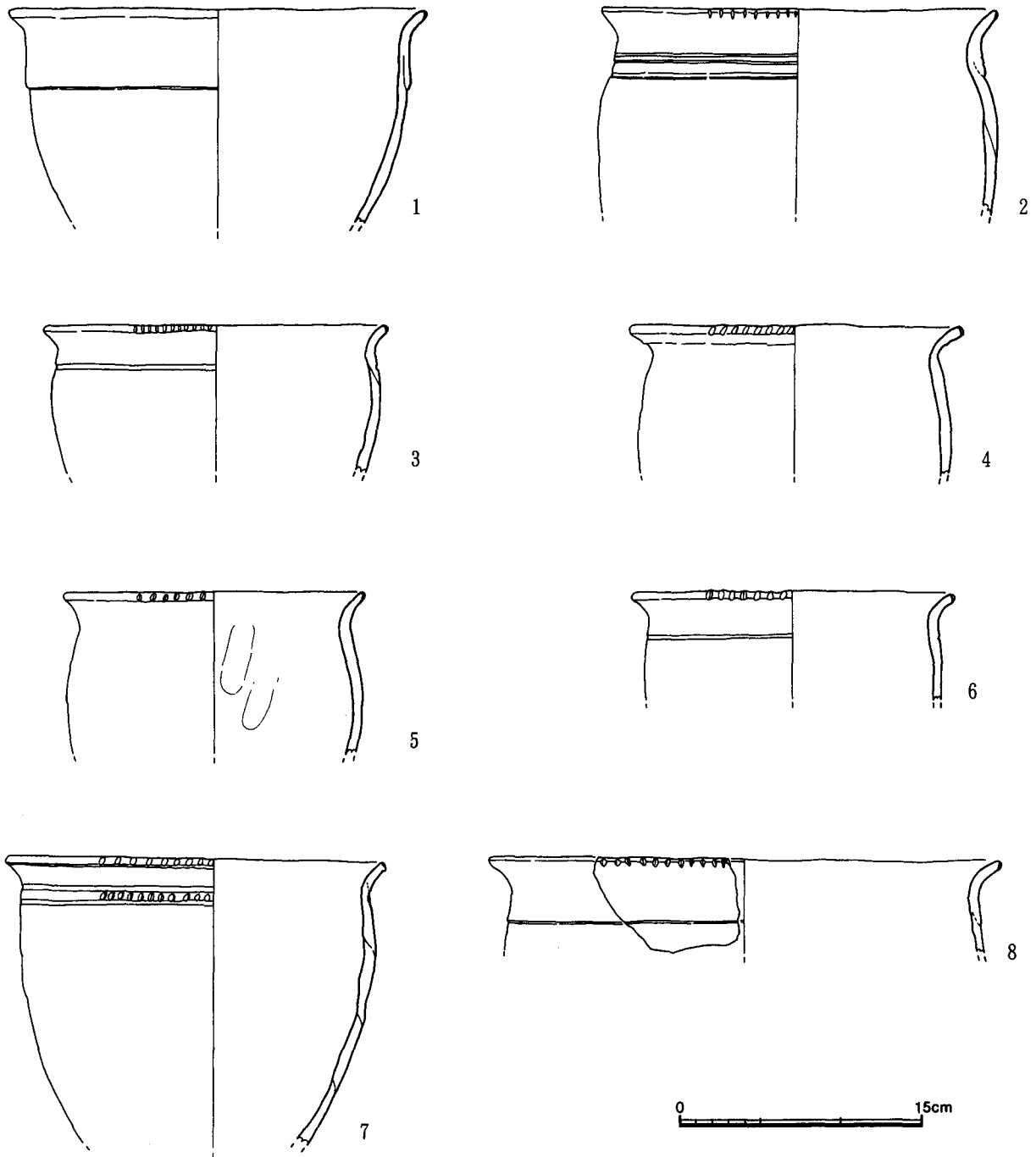


図3 神戸市大開遺跡出土土器実測図2 (縮尺1:4)

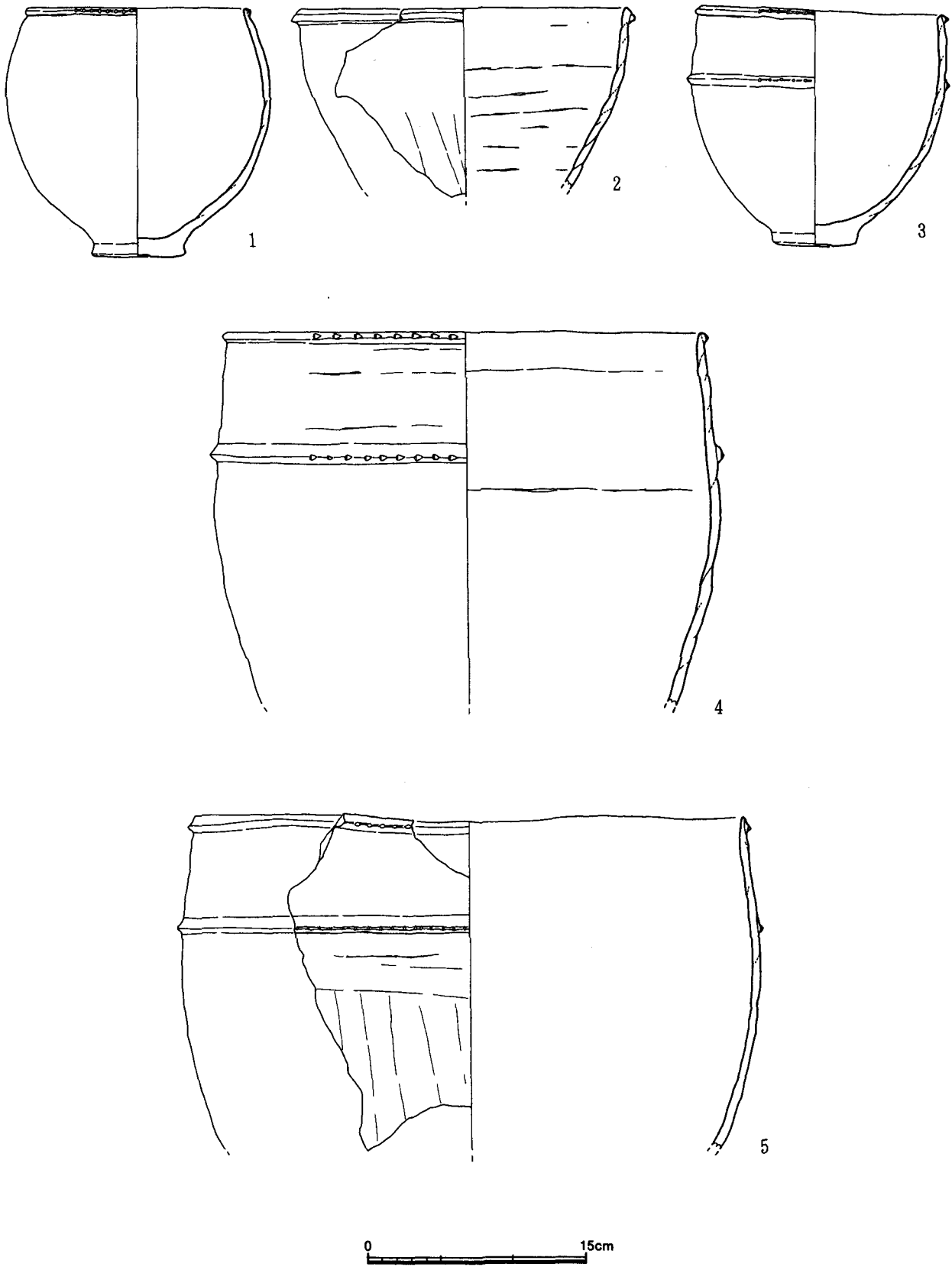


図4 大阪市長原遺跡出土土器実測図（縮尺1：4）

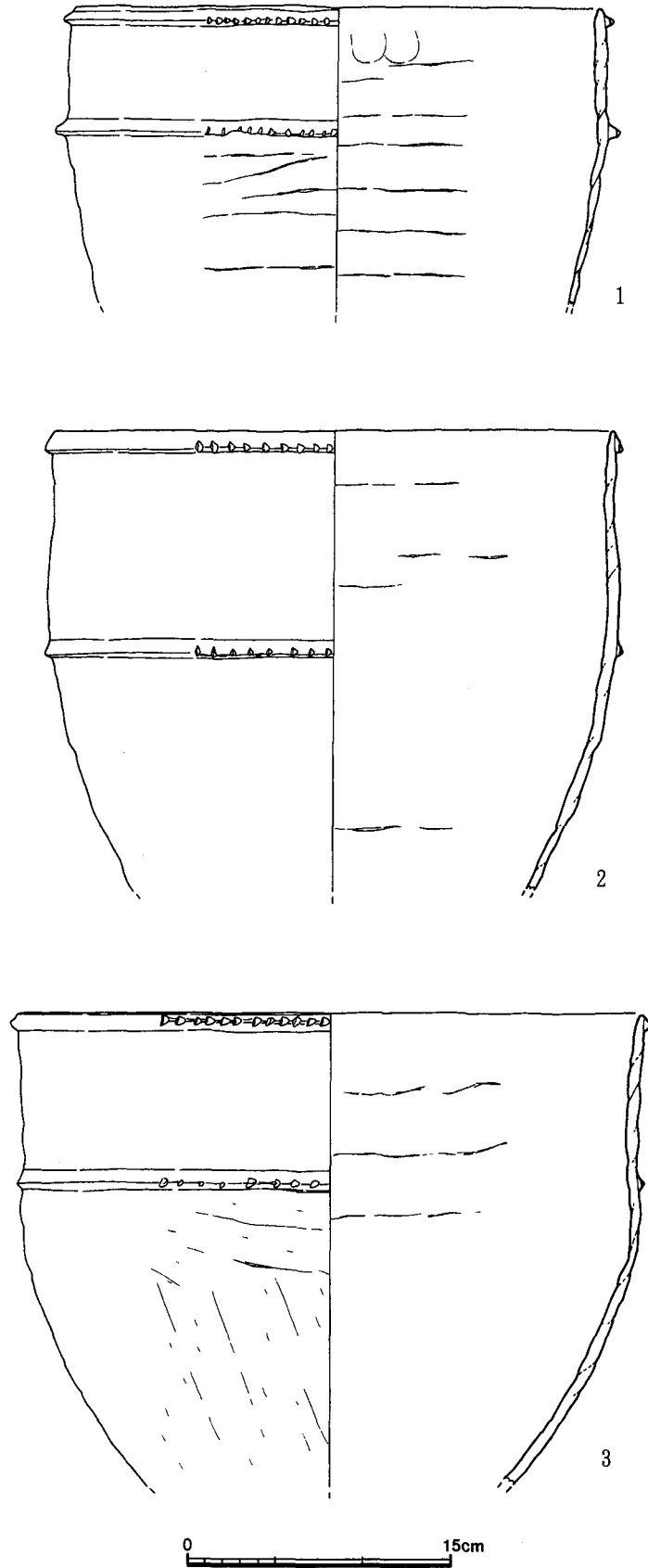


図5 東大阪市水走遺跡出土土器実測図1 (縮尺1:4)

が加わった段階をへて、屈曲型二条甕主体の段階に至ると考えられてきた。長原はまさにそれに該当するが、そうはならない大開遺跡をみるかぎり近畿の中でも一様ではない可能性が出てきた。長原の突帯文土器は、色調こそ明るい発色のものもみられるが、粘土帯の接合法、器面調整などに、内傾接合や擦過痕、ケズリなどの伝統的な技術を駆使して作られている。

長原の土器を観察してみると、大開のように遠賀川系甕の出現の影響を受け、突帯文甕を母胎にした地域型甕創出への道を進む遺跡とは異なり、遠賀川系甕の出現とは無関係に、突帯文系甕を肅々と作り続け、それを弥生化させていった作り手たちの姿が浮かんでくる⁽¹¹⁾。彼らは、高度な土器製作技術を維持し続けながら、精巧で繊細な突帯文系甕を作り続けた。従来のやり方をかたくなに守り続ける姿勢は土器だけでなく、縄文的な円環構造をみせる墓地の構造や土偶・石棒祭祀の継続にも端的に現れている。

3 水走遺跡〔原田・若松・曾我編1998〕⁽¹²⁾

8次調査で出土した資料を中心に掲載した。貝塚内の第28-2層から突帯文系と遠賀川系の土器が大量に出土している。これらの土器は汽水の影響を少なからず受けた水が侵入する淵沼の凹地底に投棄された状態で出土したという。なお突帯文系と遠賀川系の平面分布に規則性は認められない。

突帯文系甕には屈曲型二条甕と砲弾型一条甕があり、長原と同様、すでに屈曲型一条甕がみられない段階である。図5は屈曲型二条甕を、図6は外反口縁甕を主に図示した。

二条甕には在地の屈曲型一条甕の胴部に突帯を貼り付けた伝統的な器形をもつ3と、やや異質な2、口縁部突帯と胴部突帯との間隔が狭い1がある。量的には3がもっとも多い。3と2のもっとも大きな違いは、胴部最大径のある位置と胴部突帯を貼り付ける位置との関係にある。この地域にもっとも多いのは、胴部最大径の位置と胴部突帯の位置が一致せず、最大径のある部位より上に胴部突帯を貼り付ける甕である。しかし2は、最大径のある部位より下に突帯を貼り付けていて、一般的ではない。なお1は、最大径と胴部突帯の位置が一致する点で、九州西部的な特徴をもつ。

器形以外にも3と2には違いがある。1や3が胎土に金ウンモを多量に含んだり、ケズリや強いナデ調整で仕上げたりする点に伝統性をみせるのに対し、2は金ウンモを含まず、ナデ調整を徹底的に行き届かせることで接合線をほとんど目立たなくさせている点をあげることができよう。

屈曲型二条甕の胎土、器面調整、器形にみられるこれらの違いは、時期差なのか、他の事情を原因とするのか、それを判断するには類例の増加を待つ必要があるが、私はこの点に、新たに出現した遠賀川系甕との距離の違いをみせていると考えるのである。すなわち、1や3は、在来の伝統上で捉えられる突帯文系甕であるのに対し、2は大開でも指摘したように突帯文系甕として弥生化したものと考えられる。単に早期突帯文土器よりも時期的に新しいという意味ではなく、遠賀川系土器の出現に刺激を受けた在来人の自立的対応の結果と考えるのである。

ただ何度も繰り返すが、弥生化を目指した突帯文系の動きが主体にならない近畿中心部のあり方は、ここ水走でもみることができる。

水走で中心となった弥生化の動きは、図6に示すように外反口縁甕で起こっている。水走には典型的な口縁下端凸状甕はみられない。おそらく西部瀬戸内との間に時期差があるからであろうが、そのかわりに突帯文系から外反口縁甕へと転換していったのではないかと考えられる土器が存在する。その証拠は器形、口縁端部の作りと刻目の付け方、および口縁下の段の作り方にみることがで

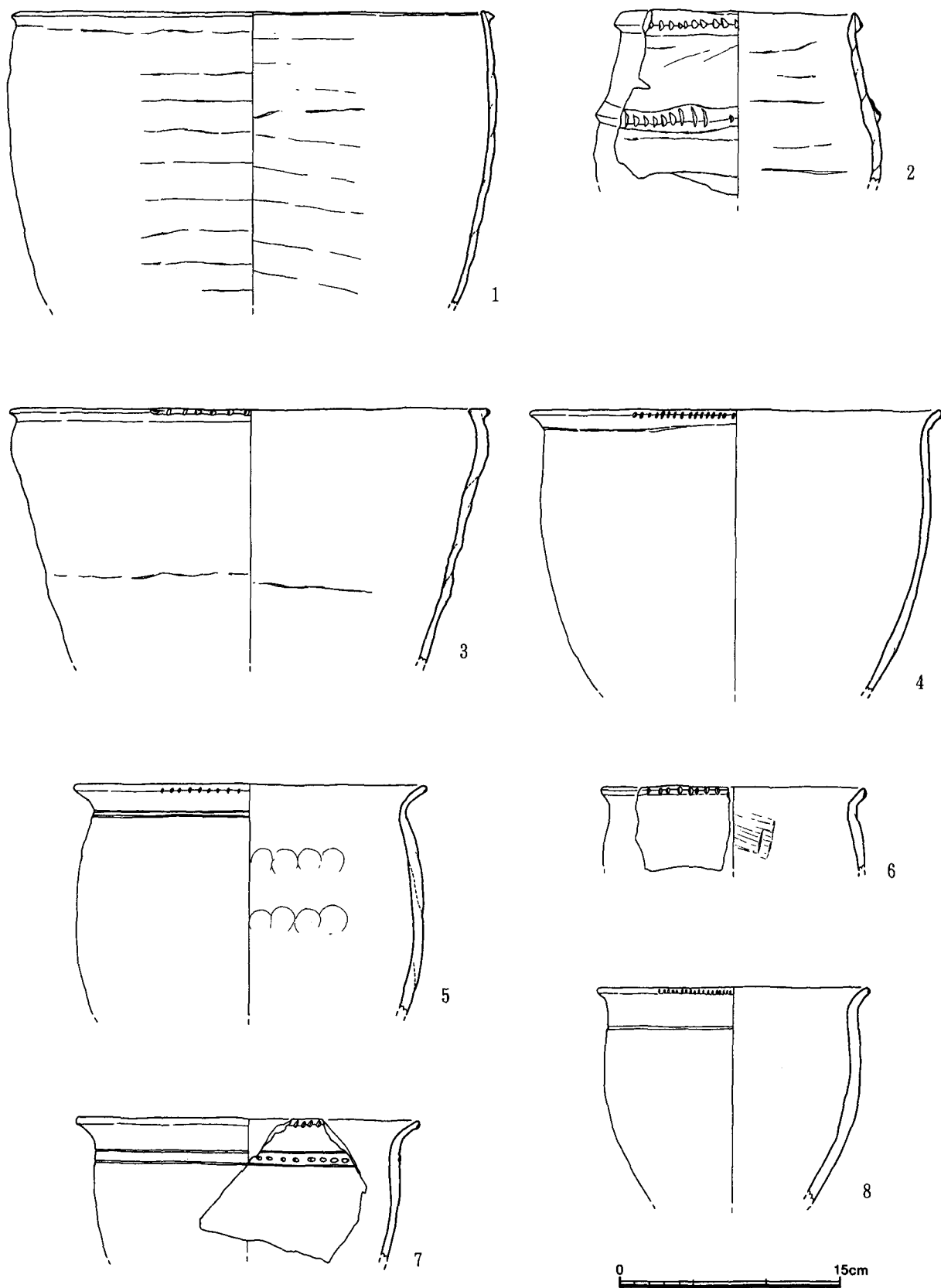


図6 東大阪市水走遺跡出土土器実測図2 (縮尺1:4)

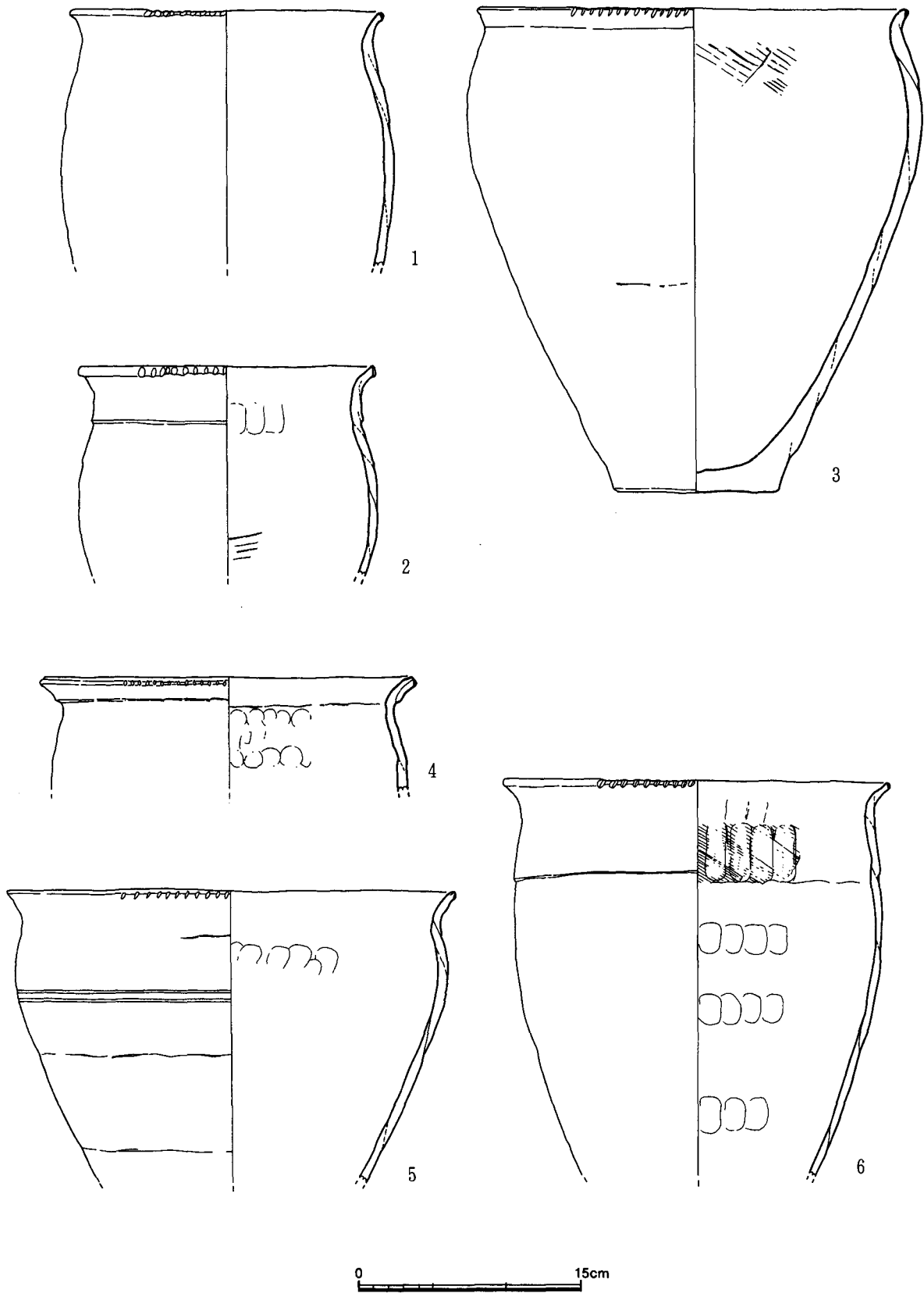


図7 東大阪市若江北遺跡出土土器実測図1 (縮尺1:4)

きる。

大きく張る胴部から口縁部の付け根で大きく縮まり、外反する口縁部という器形は、屈曲型突帯文甕の特徴であって、5・6に認めることができる。口縁端部の作りと刻目の付け方をみると、口縁部突帯にみられる特徴を4・6・7にみることができる。口縁下端凸状甕のように口縁内面につけられた凹状の窪みこそみられないものの、口縁部の面取りをおこなわないために凸状になった口縁端部の、下端の角を中心に刻目をつけるため、見た目は全面刻目ではなく下端刻目にみえる点は不完全な全面刻目ともいえるもので、口縁端部に接して突帯を貼り付け、突帯に刻目を付けた突帯文甕と外見的にきわめてよく似ている(図6-4・6・8)。

水走の外反口縁甕の口縁下には、段をもつものがいくつか存在するが、粘土帯の外傾接合に伴う段ではなく、強いヨコナデによって段状の表現をおこなった図6-4や、図示してはいないが、削りだしによる段もみられる。

器面調整は基本的に刷毛目を用いず、弥生的な要素といえるものは板の木口を使った板ナデ調整が6にみられる程度である。

以上のことから、水走が外反口縁甕を製作しているといっても、大開や後述する若江北のそのように洗練されたものではないため、稚拙、どんくさいという感じをうけてしまう要因となっている。

一方、砲弾型一条甕(図6-1)は口径が30cmもある大形のもので、ここの特徴の一つである。内外面とも伝統的な擦過痕で仕上げる。3は貼り付けと思われる口縁部突帯の上面を平坦にしたもので、九州西部の弥生I期後半以降に多いものである。いびつな形をしているものの、外面にはスガびっしりと付着していることから、煮炊き用土器として頻繁に使われていたことがわかる。

以上、水走遺跡では突帯文系の甕に二つの弥生化の方向をみることができた。一つは突帯文系甕自体の弥生化、もう一つが突帯文系甕を基盤に外反口縁甕を生み出すという弥生化である。一つの遺跡で突帯文系甕を基盤にした二つの方向性を目指した土器作りが進行していた事実を知るとき、注目されるのは水走で出土した土器以外の遺物である。

水走で出土した石器は縄文時代に伝統的なものであるし、魚を捕獲するための土鍾やエリ状の施設が見つかったことは、汽水域での漁撈が生業の大きな部分を占めていたことも予想されている。このような海との間に開かれた関係を有した集団であったからこそ、伝統を基盤に新しい取り組みをおこなうことができたと考えられる。ただいかにせん、その技術は長原に比べるとそれほど高くはなかった。水走の集団はかたくなに伝統を守り通し、洗練された地域甕づくりを継続した長原の集団とは技術レベルが異なっていたことがわかる。

4 若江北遺跡〔三好好一編1996〕⁽¹³⁾

第5次調査13トレンチ9b面、溝25、土坑14・15出土土器を図示した。突帯文系甕こそみられないものの、その技術や形態的特徴を随所にみせる外反口縁甕(図7、図8-1~4)と、いわゆる典型的な遠賀川系甕(図8-5~7)の二つに分かれる。

前者は屈曲型一条甕の器形的特徴をもつ図7-1~5、図8-4。口縁端部形態と刻目に特徴をもつ図7-2・4・5、図8-4がある。なかでも図7-1・2は、屈曲型一条甕の器形を引いていることが確実に考えているものである。同じく西部瀬戸内に分布の中心をもつ、屈曲型一条甕を

母胎に作られた口縁下端凸状甕と比べると、体部上半の屈曲の痕跡はすでに消失していて、時間的には後出する可能性がある。

この丸みを帯びた器形は4・5に引き継がれ、積み上げてきた胴部に外傾接合で粘土帯を一段積みむことによって口縁部を形成する。これによって口縁部と胴部との境界が明確化して、遠賀川系甕としての体裁を整えはじめることがわかる。不細工ながら刷毛目が使われるようになるのも、この頃からである。

図はかなり強調して表現しているが、外傾接合による粘土帯の積み上げ痕が明瞭に残されており、接合線で割れている図8-3から判断すると、5cm前後のかなり幅広の粘土帯を積み上げて作っている。粘土帯接合のような見た目ではわからない部分に外来系とみられる技術的特徴をもつことを根拠に、渡来系の人びとの手によって作られた土器と判断する研究者も多く認められるが、その一方で見た目によくわかる口縁端部形態や刻目には突帯文土器との共通性をみせる点を、どのように理解したらよいのであろうか。外傾接合による段ではなく、ヘラでかき取るように削りだした段をもつ図7-4・6、内面に条痕をのこす図7-2や、図8-2など在来の要素を多く持つ土器でも外傾接合で作られているのである。

外来の人びとと在来の人びとが工程を分けて一つの土器を作ったのか、在来の人びとが外傾接合も刻目の施文もおこなったのか、それとも外来の人びとが外傾接合と伝統的な手法で刻目をつけたのかといった、複数の可能性があるため、今後、類例を増やして総合的に判断する必要がある。

後者(図8-5~7)は胴が張らない器形で、口縁部も胴部から明瞭に外反する。削り出しの段上にヘラ描き沈線をもつ姿は、遠賀川系甕としてふさわしいものである。とくに7は非生駒西麓産の胎土をもち、中部瀬戸内など外来系の土器との関係が考えられる。

しかしこれらが在来の要素をまったくもっていないかというそうではない。5・6ともに刻目の施文法には突帯文土器の技術的特徴を併せ持っているし、刻目の位置も半全面なのである。したがって前者とは時間差をもち、前者に比べて遠賀川系甕を製作する技術がより上達、洗練されたものと考えたい。削り出し突帯が出現する外反口縁甕の段階は、定型化した遠賀川系甕が成立するまでの準備期間として捉えることができよう。

以上のように、若江北の土器製作者たちは、西方の標準甕の情報を受けながら、突帯文系の屈曲型甕を母胎に段階を追って外反口縁甕を定型化していったと理解した。その根拠として目に見えないところに外来の新しい要素を取り入れながらも、もっとも目立つ口縁端部などには在来系の伝統的な手法を駆使するという点を上げた。

若江北のあり方を中部瀬戸内の状況と比較すると、違いがかなり大きいことに気づく。岡山市津島遺跡南池地点の外反口縁甕とは外見がまったく異なるからである。このことも、今回取り上げたI期の古い外反口縁甕が、在来の人びとによって作られたことを示す証拠といえよう。

5 唐古・鍵遺跡〔豆谷・清水1988〕⁽¹⁴⁾

第66次調査SR201(図9-1~3)、第20次調査SK215(同5・6)、第37次調査土器群(同4)の資料を図示した。このうちSR201は最古の弥生土器を出土した自然河川として報告されたもので、層位的に土器が出土している。1は最下層、2・3は7層、そして図示していないが、6層からは若江北でみたような典型的な削り出し突帯をもつ遠賀川系甕(図8-5・6)に比定される甕が出

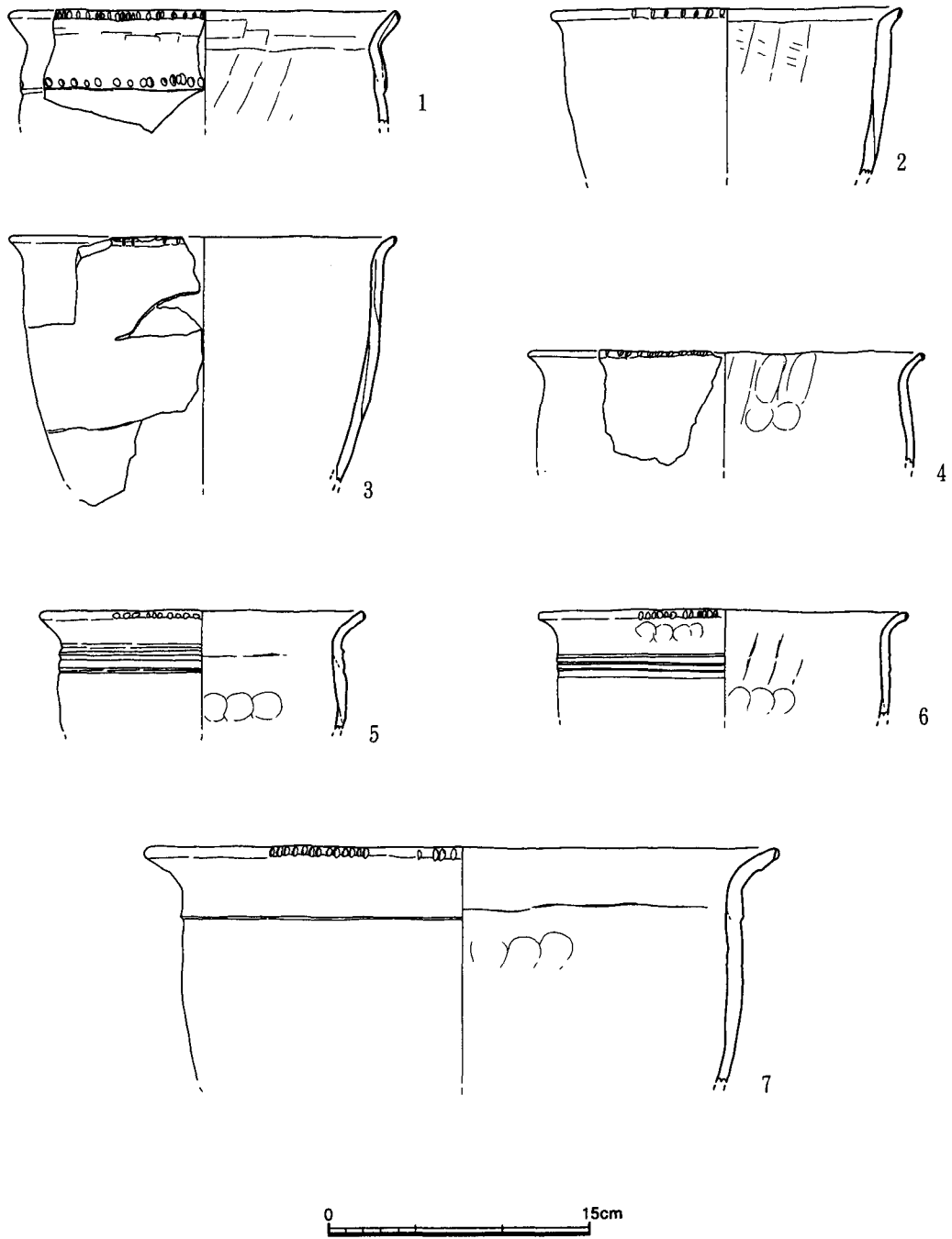


図8 東大阪市若江北遺跡出土土器実測図2 (縮尺1:4)

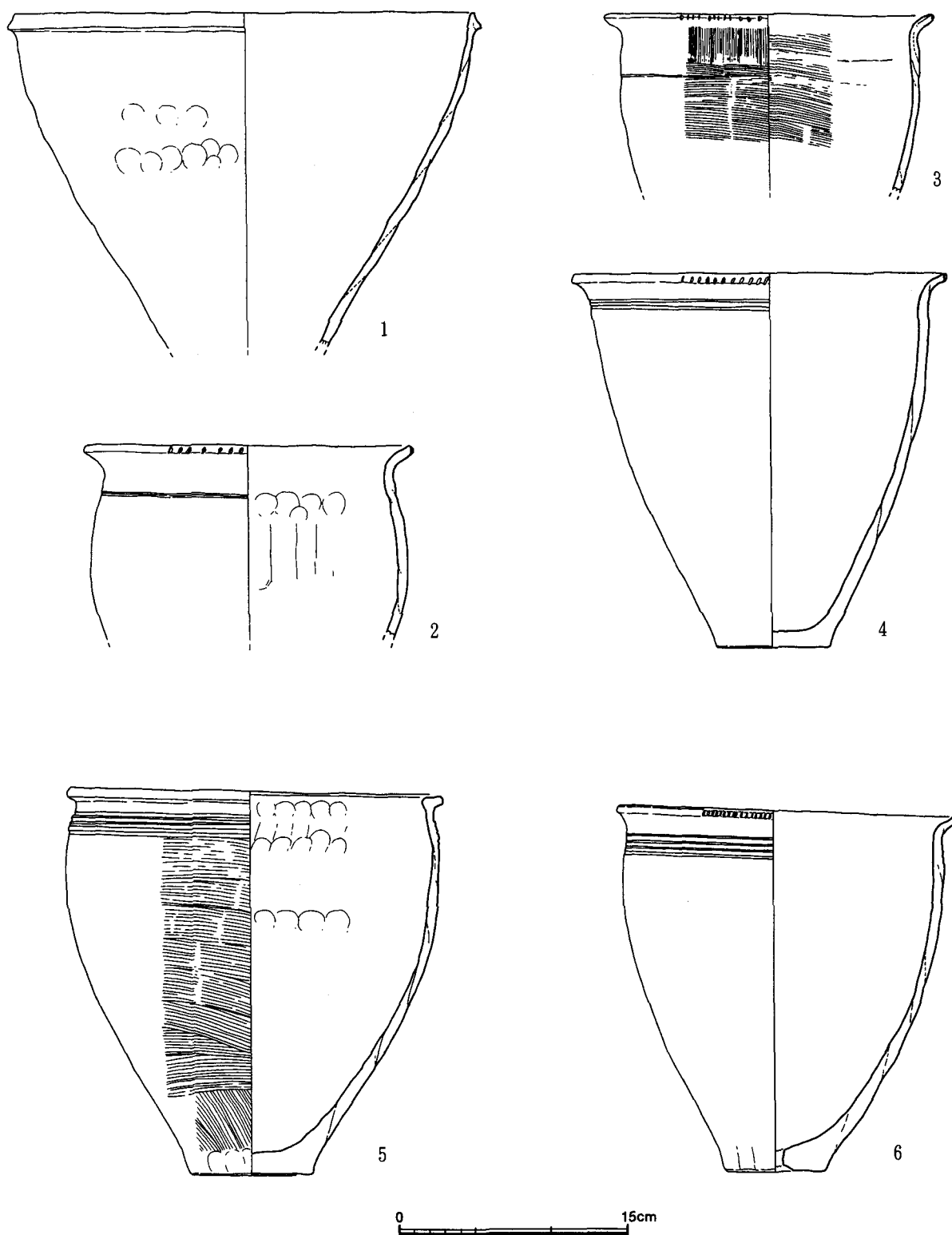


図9 奈良県田原本町唐古・鎌遺跡出土土器実測図（縮尺1：4）

土している。

1は最下層の9層（灰白色砂層）から出土した、唐古・鍵遺跡のI期でもっとも古い突帯文系甕である。この層は戦前に突帯文土器が出土した白色砂層に相当すると考えられている。したがって唐古・鍵遺跡出現期の土器とみられる。器表内外面に指頭痕をよく残していて、摩滅はしていない。長原式より後出し、水走（図6-1）の砲弾型一条甕に併行すると考えられる。なお8層より上からは遠賀川系甕単純の甕組成となる。

7層から出土したのは2・3である。2は大阪湾沿岸の遺跡のところで述べてきたのと同じもので、屈曲型一条甕を母胎に造り出されたと考えられる外反口縁甕である。半全面の刻目に、削り出し状の段を口縁下にもつという特徴をもつ。3は屈曲型一条甕的な形態を離れ遠賀川系甕の形態に近づいた体部をもち、遠賀川系甕の特徴といわれる外傾接合で作られているものである。しかし胴部上半に条痕調整と同じ手の運びでヨコ方向の刷毛目を施すなど、屈曲型一条甕系の手法もあわせもつ。これらの甕には削り出し突帯の壺が伴っていることから、中段階の甕にはまだ細部に突帯文系の特徴を残していることがわかる。

4・6の段階になると、遠賀川系甕として定型化した器形をもち、器面調整も完全に弥生化することがわかる。

6と共伴したのが5である。一見すると瀬戸内甕に似ているが、口縁部が貼り付けなのか、外反なのか判断がつかなかった。胴部の刷毛目調整が条痕と同じヨコ方向に施されていることから推測すれば、口縁部形態を含めて突帯文系と思われるが、そのことを判断するのに大きな決め手となる粘土帯の接合方法が、内傾か外傾かは断定できなかった。

もし5が突帯文系であったとしても、1から5への変化は形式的な断絶が大きすぎるので、5は瀬戸内甕と同様に、I期後半以降に本格化する中期甕成立への過程の中で捉えた方が適切と考える。

したがって、唐古・鍵遺跡における弥生甕成立の動きは、突帯文系として弥生化する地域甕の創出は認められず、外反口縁甕として弥生化する標準甕創出の動きのみが行われたとみてよいだろう。ただしその動きの第一段階にあたる2や3を大阪湾沿岸にもっていくと、大阪湾沿岸地域における標準甕創出過程の第二段階に相当するため、唐古・鍵遺跡の弥生甕創出の動きは大阪湾沿岸地域より一段階遅れることが予想される。このことは唐古・鍵最遺跡でも古式の突帯文系甕1からも追認できる。すなわち、1は長原式よりも後出する砲弾型一条甕の時期に相当し、かつ削り出し突帯をもつ壺が出土した層より下から出土した。もちろん、これが時間差を意味するとは即断できないが、それほどかけ離れた時期ではないであろう。したがって唐古・鍵ムラで本格的な遠賀川系土器が現れるのは、大阪湾沿岸に遅れた中段階のある時期に求めることができよう。

③……………近畿中心部における遠賀川系甕の成立過程

摂津の大開、大阪平野の長原、水走、若江北遺跡、大和の唐古・鍵遺跡における弥生早・I期の甕を対象に、外来の遠賀川系甕の情報が在地の突帯文系甕に及ぼした影響をみたところ、遺跡ごとに影響の受け止め方と対応が異なるという興味深い事実が明らかになった。

まずほとんど影響を認められないのが長原遺跡である。かたくなに在来の伝統を守り通し、黙々

と突帯文系甕を作りつづける。しかも洗練された製作技法を保持したままである。

次に影響の受けとめ方が共通していたのが水走と若江北であったが、その度合いは異なっていた。削り出し突帯が出てくるまで、二遺跡とも典型的な標準甕をみることはできず、あるのは地域甕としての外反口縁甕と突帯文系甕のみである。ただ水走では突帯文系甕が目立つのに対し、若江北は外反口縁甕が中心的な位置を占めている。最終的には削り出し突帯の段階になって外反口縁甕が定型化した遠賀川系甕となる。これを根拠に大阪湾沿岸地域の遠賀川系甕の出自を突帯文系土器を基盤とする外反口縁甕に求めたのである。

そして唐古・鍵に弥生文化の波が及んだのはすでに突帯文系甕が消滅した段階だったためか、屈曲型の突帯文系甕はなく、外反口縁甕からのスタートであった。

この四つの遺跡にみられた遠賀川系土器に対する対応の強弱は、両系統の土器の組成比にもあらわれている。長原は突帯文系単純、水走は突帯文系と外反口縁甕がほぼ共伴、そして若江北は外反口縁甕が主体で突帯文系はごくわずかであった。そして唐古・鍵は外反口縁甕のみである。このうち唐古・鍵は時間的に後出するため除くとしても、他の遺跡での組成比は、弥生開始期にみられた個別の対応を何らかの形で反映していると考えた。では大阪湾沿岸の中でこのように対応が分かれたのはなぜであろうか。

大阪湾沿岸のあり方と中部瀬戸内とを比較してみよう。大阪湾沿岸では在来の突帯文系甕が外反口縁甕をへて遠賀川系甕へと徐々に弥生化していく状況を確認することができた。一方、中部瀬戸内では岡山市津島遺跡南池地点にみられるように、突然、定型化した標準甕の遠賀川系甕が出現しているように見える。突帯文系の地域甕は中段階以前にはほとんど存在せず、みられるのは外反口縁甕だけである。しかしこれは標準甕の影響を受けて生み出されたもので、あくまでも副次的なものである。したがって標準甕創出の過程を段階的に復原することはむずかしい。

中部瀬戸内と大阪湾沿岸地域にこのような違いが生じた背景には、本格的な水田稲作を始めるにいたった契機が異なっていた可能性を考えたい。両地域とも在来の人びとが弥生甕の製作に携わったという点で違いはない。ただ完成されていたものが最初から存在した中部瀬戸内と、在来の突帯文系甕が少しずつ変容することによって定型化していったという大阪湾沿岸との違いがある。そこには、影響を与えた側の介入度の差も当然考えられるのであるが、文化伝播の質的な違いといったものも想定できる。

すなわち、東部九州から中部瀬戸内までの瀬戸内海沿岸地域と、それ以東の大阪湾沿岸では、情報をもたらすネットワークが異なっていた可能性である。標準甕、夜白系の壺や無文土器系の壺が直接はいる中部瀬戸内までは、下條信行のいう灘単位のリレー式伝播によって直接的な文化拡散がおこなわれたが、それ以東になると縄文以来の情報網を情報が行ききしたと考えられる。この時期に活発化する生駒西麓産土器の動きがこのことを物語っている。中部瀬戸内からの農耕民の移住を想定する向きもあるが、甕に関する限り、在来人の技術的伝統が強く現れていた。讃岐・金山産の石材が時限的に増加する事実も指摘されているが、彼らとのかかわり方の具体像は今後の課題といえよう。

おわりに

本稿では以下の点を明らかにした。

- 1 四つの遺跡では外来の遠賀川系土器に対して三つの個別的対応をおこなっていたことがわかった。
 - ・ 屈曲型突帯文甕だけが突帯文系甕として弥生化する長原遺跡。
 - ・ 屈曲型突帯文甕が、突帯文系甕と外反口縁甕という二つの形で弥生化する大開、若江北、水走。このうち大開と若江北は外反口縁甕主体。水走は約1：1の器種構成比率を示す。
 - ・ 屈曲型突帯文甕が外反口縁甕としてのみ弥生化する唐古・鍵遺跡。参考までに津島遺跡南池地点は標準甕主体で、外反口縁甕もそこそこみられる。しかし突帯文系甕は数点、出ているにすぎない。
- 2 外反口縁甕が定型化して遠賀川系甕が成立するのは中段階であったが、岡山と今回の四遺跡では、途中の過程に違いをみせた。九州北東部の標準甕（遠賀川式甕）を母胎に標準甕が成立し、その影響を受けて外反口縁甕が成立する岡山、屈曲型突帯文系甕が外反口縁甕をへて標準甕が成立する近畿である。
- 3 四つの遺跡の遠賀川系甕は、中部瀬戸内で確認できる板付Ⅰ式甕→遠賀川式甕→遠賀川系甕という標準甕の系列の流れのなかで成立するとは考えられず、中部瀬戸内の標準甕の間接的な影響を受けることで、在来の屈曲型突帯文甕が地域甕として二つの方向へ弥生化して、そのうちの外反口縁甕が中段階に遠賀川系甕として定型化すると考えた。外反口縁甕が標準甕成立のあおりを受けて成立する岡山と、外反口縁甕が系列の中に加わって、そこから標準甕が成立する近畿である。
- 4 岡山と近畿の遠賀川系甕創出に至る過程の違いを、外来系文化の拡散過程の違いに求めた。岡山まではある程度の人が九州北部や西部瀬戸内からやってきているのに対し、それ以东には及んでいないこと。近畿へ行ったとすれば、中部瀬戸内の人びとであったことが予想される。外傾接合であっても目につくところに突帯文系甕の技術を多用する点にそのことがあらわれている。

いずれにしても、中部瀬戸内まではリレー式伝播、それ以东は情報主体の拡散であった。

1987年以来、西日本の弥生Ⅰ期甕は、突帯文系、板付・遠賀川系、そして両方の特徴をもつ折衷系からなると考えてきたが、今回の分析によって、近畿中心部の外反口縁甕は、搬入品を除くと突帯文土器を母胎に中部瀬戸内の遠賀川系土器の影響を受けて成立したことが明らかになったといえよう。

本稿を草するにあたり、以下の機関のお世話になった。記して感謝の意を表する。

東大阪市教育委員会、神戸市教育委員会、(財)大阪府文化財センター、田原本町教育委員会、(財)大阪市文化財協会。

注

- (1) — 藤尾慎一郎2002:「瀬戸内における遠賀川系壺の成立過程—弥生土器瀬戸内起源説の検証—」(『環瀬戸内海の考古学』283-312, 古代吉備研究会).
- (2) — 下條信行1995:「瀬戸内—リレー式に伝わった稲作文化—」(『弥生文化の成立』131-140, 角川選書).
- (3) — 小林行雄1932:「吉田土器及び遠賀川式土器とその伝播」(『考古学』3-5, 21-27).
- (4) — 佐原真1975:「農業の開始と階級社会の形成」(『岩波講座日本歴史』1, 114-182, 岩波書店).
- (5) — 金関丈夫1955:「人種の問題」(『日本考古学講座』4, 238-252, 河出書房).
- (6) — 藤尾慎一郎1991:「水稻農耕開始期における地域性」(『考古学研究』38-2, 30-54).
- (7) — 前田佳久編『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社, 1993.
- (8) — 日本列島が弥生時代にはいったという意味であって、別にこの地域が九州北部と同様の文化内容(弥生早期)をもっていたという意味でないのだが、近畿に弥生早期はないという論調をよく目にする。時代区分の基本原則をどのように考えているのか説明したうえで論を展開することが必要であろう。
- (9) — 藤尾慎一郎2000:「出雲平野における弥生文化の成立過程—弥生I期突帯文系土器がかたる農耕民化—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』83, 97-127).
- (10) — 長原遺跡調査会編『長原遺跡発掘調査報告書』大阪市交通局地下鉄谷町線延長工事31・32工区の発掘調査, 大阪市文化財協会, 1978. 田中清美・家根祥多編『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ, 大阪市文化財協会, 1982.
- (11) — 口縁部突帯の貼り付け位置が一貫して上昇していき、口縁端部に接するように変化していくのは、九州西部と同じ現象である。この点も突帯文土器の弥生化に専念した集団に共通する特徴といえよう。
- (12) — 原田修・若松博恵・曾我恭子編『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』水走遺跡第8次・9次調査, 鬼虎川第27・28次調査, 東大阪市教育委員会・(財)東大阪文化財協会, 1998.
- (13) — 三好好一編『東大阪市所在巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第5次—』都市計画道路大阪中央環状線巨摩橋交差点南行車線割道橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告第15集, 1996.
- (14) — 豆谷和之・清水琢哉「唐古・鍵遺跡第66次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』1977年度, 10~11頁, 1988.

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(2003年2月13日受理, 2003年5月9日審査終了)

The Formation Process of Onga River-type Jars in Kinki — Yayoi jars from Settsu, Kawachi and Yamato —

FUJIO, Shin'ichiro

This paper will explain the process by which Yayoi jars emerged in places such as Settsu, Kawachi and Yamato in central Kinki. Yayoi jars are new jars that appeared in the Early Yayoi period in various areas of western Japan. Up until now they have mainly been referred to as Itazuke-type, Onga River-type and Onga River-style jars. In an earlier examination of Yayoi jars from northern Kyushu through to central Setouchi, I have shown that there are three different varieties of Yayoi jars. The first has come from the cord-patterned jars of an earlier period whereby cord-patterned (*tottaimon*) jars became Yayoi jars, with jars of the Kamenoko type from Chikugo and the Shimojyo type from Bungo falling under this category. The second variety is similar to the first in that it comes from the cord-patterned jar, but shows a shift away from a cord pattern to a jar with a twisted rim (*gaihan-koen*), with jars from western Setouchi with raised undersides of the rim (*koenkatan-totsujokame*) being one such example. The third variety comes from the line of Itazuke jars that go back to the unpatterned pottery of the Middle period, and evolve into Itazuke I-type jars and Onga River-type jars. Until the middle of the 1980s, jars from Early Yayoi marked the last of these jars. The first two were called "regional jars" because they were distributed over a small area and showed influences particular to each region, while the third was referred to as the "standard jar" because these jars were distributed over a wide area and there was little variation according to region. This paper verifies Yayoi jars from central Kinki on the basis of these criteria. The results of this analysis are as follows. First, the Yayoi jars from each of the ruins are different. Second, it has been possible to confirm that because following the emergence of regional jars that were either the cord-patterned type or jars with twisted rims, standard jars emerged from a limited number of ruins, the Yayoi jars from each of these ruins are confined in terms of period as well as region.

From the above, it follows that after curved single-ribboned (*kukkyokugata-ichijo*) jars evolved into jars with twisted rims, they came to be stylized as Onga River-style jars. This constitutes the emergence of standard jars from regional jars. This is vastly different from regions west of central Setouchi where standard jars came into existence first, which then led to the evolution of twisted rim jars.
